

「恩」と人間形成—山折哲雄の恩人観を手掛かりに—

工 藤 真 由 美
四條畷学園短期大学

Onn and Formation as Human Beings —Through a Study of Yamaori's Onnjinn

Mayumi KUDO
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第50号 別刷
平成29年12月25日

「恩」と人間形成—山折哲雄の恩人観を手掛かりに—

工藤 真由美*

Onn and Formation as Human Beings —Through a Study of Yamaori's Onnjinn

Mayumi KUDO

山折哲雄は自己の三人の恩人との出会いを通して、人間における恩や恩人との関係を考察した。それは夏目漱石の『虞美人草』『草枕』『こゝろ』に描かれた近代的な人間のエゴの問題、人間の善、悪の複雑な心性と道義心、義理、人情の問題とも複雑に絡んでいる。人間形成上の恩、恩人はただ、人間が恩を返すということで自己を向上させる原動力として働くというような単純な次元ではなく、山折が「債務至上主義」と名付けたような、ただひたすら恩を感じながら生きていくしかない、「恩を着る」という次元の問題として複雑に人間形成にのしかかるものである。

Key words: 恩、恩人、道義心、義理、人情

(1) はじめに

人が自己の問題について語るとき、人生を左右した人を恩人として語ることがある。

恩を受けたという言葉で、その影響の大きさを語ることもある。人間がこの世で生きていくうえで人との関係を取り結びながら生きていく中で生じる恩や恩のある人との出会い、恩人との関係について、教育思想、人間形成という観点から考察する。今回はその端緒として、山折哲雄の恩人観を手掛かりに考察したい。

(2) 「恩」の概念

恩を含む言葉の使用として、恩をあだで返す、恩知らずなどの用法があり、古来日本には「恩」という思想がある。ではそもそも「恩」という概念は何であるのだろうか。

日本大百科全書によると、恩とは、次のように書かれている。

『日本書紀』や『古語拾遺(しゅうい)』などの日本の古典に出ている「恩」は「めぐみ」「みをつくしみ」「みうつくしみ」などと訓(よ)まれている。そして「めぐみ」は、草木が芽ぐむなどというときの芽ぐむを名詞形にしたものとされているが、

草木が芽ぐむのは冬眠していた草木の生命力が陽春の気にはぐくまれて目覚めることによる。そのようにある者が他の者に生命を与えたり生命の発展を助けることが恩を施すことであり、その逆が恩を受けることであるとみられる。したがって恩の存在するのは人間の間だけでなく、われわれは天地人の三者から広く恩を受けていることになる。しかしこれは広義の「恩」で、普通にはある人によって示された好意とその良好な結果とに対して感謝するという狭義の感恩が考えられ、この感恩の対象は父母と君主であると貝原益軒(かいばらえきけん)などは考えていた。つまり感恩の究極は忠孝にあるというわけであるが、日本思想における感恩の観念は仏教の影響によるところが大きく、中国の儒教は恩を説くことはまれであった。⁽¹⁾

また、大辞林によると、「恩」には三つの意味があり、

- ①他の人から与えられためぐみ。いつくしみ。
 - ②封建時代、家臣の奉公に対して主人が領地などを与えて報いること。
 - ③給与。手当。
- となっている。⁽²⁾

また、仏教における恩の意味としては「サンスクリットのウパカーラ upakāra (他の者を思いやること)、またはクルタ kṛta (他の者から

* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

自分になされた恵み)の漢訳。仏教では、人は恩を知り(知恩)、心に感じ(感恩)、それに報いなければいけない(報恩)とされる。具体的に、『正法念処經(しょうぼうねんしょきょう)』では母、父、如来(によらい)、説法の法師から受ける四種の恩があげられ、さらにのちには『心地観經(しんちかんぎょう)』で父母、衆生(しゅじょう)、国王、三宝(さんぼう)の四種の恩が説かれた。いわゆる四恩思想である。親子や夫婦間の愛は恩愛といい、出家修行者には断ち切るべきものとされる。中国では親から受ける恩が孝の思想と関連して強調され、『父母恩重經(ふぼおんじゅうきょう)』の偽經が制作されるに至った。⁽³⁾ となっている。

さらに木村宣彰は「生活の中の仏教用語」の中で「恩」について次のように説明している。

「民話『鶴の恩返し』は人々に深い感動を与える。この民話を題材にした木下順二の戯曲『夕鶴』は英語、中国語、ロシア語などに翻訳されて海外でもよく知られている。このような恩返しの話は、仏教説話集の『日本霊異記』に数多く見られる。助けられた亀や蟹が人間に恩返しをする話の結びは、決まって『動物さえ受けた恩を忘れず恩返しをする。まして人間において恩を忘れてよいものであるうか』となっていると紹介している。

また、「仏教經典は「知恩報恩の者、人中の珍宝となす」、「知恩報恩は、これ菩薩行」(『宝積經(ほうしゃくきょう)』)などと説いている。中国古典にも〈めぐみ〉を意味する恩の語があるが、仏教經典の「恩」は「他人を思いやること」を意味するサンスクリットのウパカーラ、または「(他から)為されたこと」を表すクリタの訳語である。他によって「為されたことを知る」という意味のクリタジュニャは「知恩」と訳される。

このように、人間は、特定の関係者や身近な人からだけ恩を受けているのではなく、あらゆる人から恩を受けている。これを「衆生の恩」という。我々は人のみならず自然界や動植物から様々な「恩」を受けている。他によって「為されたこと」即ち「恩」の結果として我々は存在しているのである」と解説している。⁽⁴⁾

このように見てくると、「恩」は、広義には、目に見えるものだけでなく、目に見えない因縁にまで及ぶものであり、狭義には、他者からのめぐみ

といえる。そのめぐみに対して何らかの反応をしようとする人間の変化、これが「恩」と人間形成との関係として推測される。恩は多くの場合は、与えられた恩に対して自己を良い方向に向かわせ、向上させることで恩にみあう自己を少しでも形成しようとする原動力としてはたらくのではないかと思われる。それが一般に「恩に報いる」や、「恩返し」という言葉で表現するところのものであろう。さらに考察を進めていく。

(3) 山折哲雄の三人の恩人

前章で恩の語源から恩は他者からの恵みであることがわかった。そこから恩は他者からの恵みに対して何らかの反応、すなわち良い方向へ自己を向かわせる原動力として働くのではないかと推察された。それを受けて、さらにここでは、山折哲雄の『恩人の思想』⁽⁵⁾ から恩人について考察してみたい。

山折は86歳の現在、人や物事を善悪や正邪で判断するのではなく、関わりの中で生まれた「人の恩」の大きさを感じるようになり、恩人とも呼ぶべき三人との関わりを回想しつつ、著書の中で、今日の日本で、教育や学問の世界における師と弟子の関係はどのようなになっているのか、人の恩や恩人について考察している。

山折は人生における三人の恩人を挙げている。一人は大学時代の恩師、金倉圓照先生、二人目は大学卒業後の職業人としての恩人、出版社の神田龍一さん、三人目は生涯かけた専門領域ともかわる宗教家、藤井日達上人である。

ここで、山折が三人を恩人と呼ぶに至った三人との関係、経緯についてみていく。

(3) — (1) 金倉先生と山折

金倉先生とは、山折の大学時代の指導教官、金倉圓照氏である。山折は以下のように紹介している。

「金倉圓照(1896～1987)、インド哲学者。鹿児島生まれ。東京大学印度哲学科卒。ヨーロッパに留学、H. ヤコービに師事。東北大学教授、のちに立正大学教授、宮城教育大学長を歴任。インド哲学、仏教学に関する多数の著書、論文を発表。

原典に基づき一字一句ゆるがせにしない研究方法、自らを律する生活態度と他者への寛大さ、後進、門下生を対等の研究者として遇する謙虚さなどから文字通りインド哲学・仏教学界の最高権威として敬慕された」⁽⁶⁾

山折が魅力を感じた師の文章というのは、『印度中世精神史』で、インドの古代と中世の「精神史」を巡る記述であり、その魅力から繰り返し読み、その文章の癖まで語っていたというほどである。山折は自らの著書のタイトルに「精神史」の表現を使っていたことに気付いたという。これほどまでに師の影響は大きかったのである。

その後山折は『インドの婚姻と家族』という書物に出会い、この研究書の翻訳をすすめようとの思いを強くしていった。当時のことを次のように回想している。

「それは大学院の博士課程に進んだ頃だった。金倉先生は在職中だったがほどなく定年退官し、東京の立正大学に移った。師が去った後のキャンパスには、空虚な大きな穴が開いたようだった。そのなかを寂しい風が吹いている。そんな光景に嫌気がさしてきた。そのうち古典的な文献学があったという間にどこかに失せてしまった。正直そう思ったのである。」と。⁽⁷⁾

さらに、「ほどなく金倉先生から声がかかり、東京の鈴木学術財団という仏教やインド学にかんする学術書を編集したり出版したりしているところで仕事をしないかというものであった。理事をしていた金倉先生が推薦の労を執られた。サラリーマン生活が始まり傍らで『インドの婚姻と家族』の翻訳を継続していた。400字詰め原稿用紙1000枚近くの訳稿にもなり、それを携えて金倉先生の下を訪ね藁にもすがる思いで訳稿に目を通していただくことを願い出た。先生は『それでは、みておきましょう』と言われた。嫌な顔一つされなかった。

時が流れ、しばらくたってから先生から点検終了の知らせが入った。拙い訳稿に一枚一枚目を通し、丹念に朱筆を加えられた師の姿が、眼前に蘇っていた。」⁽⁸⁾

「その師によって与えられた負い目の全重量は、とても返すことなどおぼつかない。その恩は返そうとしてもとても返し切れるものではない。」⁽⁹⁾と

表現するほどである。この翻訳は「解説」と「索引」を付して刊行された。この出版も金倉先生の推薦を得たからであり、山折は巻頭に「金倉圓照先生にこの訳書を捧ぐ」と書いた。当時山折は三十八歳であった。

ここまでの金倉先生との関係でも、恩を感じるに十分足るものであると思われるが、以下の文章が、恩というものの深さと複雑さ示唆することとなる。

「大学院に入って二年が過ぎ、修士論文を書き上げて先生の研究室にご挨拶に赴いた時のことだ。ちょうど市内の女学校で、社会科を教える非常勤の職に就くことになっていて、そのことを報告するためでもあった。私の話をじっと聞いていた先生は、さいごになってポツンと言われた。

「教師というものは、一度は必ず学生に裏切られるものなんです。」

突然私は何をいわれたのかがわからず、ただぼんやりとしていたことを覚えている。

その先生の言葉を私は、どんな学生・生徒でも必ず教師を裏切る、というように受け取って、衝撃を受けたのである。」⁽¹⁰⁾

山折は自身の教師生活で先生の言葉を実感したという。ここでは山折自身の教師生活には触れないがしかし、山折自身のその後の研究者としての道が指導教官金倉先生への裏切りという点で負い目として感じられていく。

その後山折は、論文「アショーカ王—アジア的専制君主の宗教政策」を書き『歴史評論』に投稿し採用された。そのタイトルを「清算アショーカ王研究」として掲載されることになったのである。この論文は学会の重鎮中村元氏のアショーカ論を批判したものである。友人知人が一人去り、二人去りしていったという。そして、当時を振り返り、次のように表現する。

「金倉先生との距離もころなしに少しずつ開いていくようだった。恩人への負い目のようなものが、目に見えない形で両肩にのしかかっていたのかもしれない。恩人の姿が少しずつ遠のいていく。虎の尾を踏んでしまった以上、どうしようもないことだった。それが先生に対する私の裏切りの第

一步だったのかもしれない。」⁽¹¹⁾と。

このように恩人に対する思いとは裏腹に、恩人を裏切るような、後ろめたさの中に歳月を送ることになる。

(3) — (2) 神田龍一さんと山折

山折は、1967年立正大学の非常勤講師になった。当時立正大学の教授をしていた金倉先生の推薦からだった。さらに金倉先生のおかげで、1969年『インドの婚姻と家族』の翻訳が出版された。

ちょうどそのころ山折は、突然激しい吐血に見舞われ入院を余儀なくされ、4か月に及ぶ闘病生活を送った。その入院中に二人目の恩人と出会う。

病室に何の前触れもなく突然、出版社春秋社の社長、神田龍一という人が訪ねてきた。4か月の入院中に13回でもある。退院後に春秋社に入社しないかという誘いであった。

「週三回だけ出勤してくればいい。あとの日は書きたいものを書いて、望むなら、それをわが社で出版してもいい。社での仕事としては、あんたが出したいものを出版してやる」という条件である。もともと編集の仕事が嫌いではなかった山折は神田さんの有無を言わせぬ勧誘に乗ったのである。

入社してほどなく編集者としての最初の仕事を行ったが、その間神田さんは一切口出しをしなかったという。さらに入社条件として提示された、書きたいものを書き出版してもいいという点においては、山折は何よりも蓮如の人間性を明らかにし、現在に蘇らせたいと考えていた。蓮如の生涯と行動、独自の思想にひかれ資史料を集め、書きとめていった。結果として『人間蓮如』として入社1年後に出版された。

これだけでも恩人といえるであろうが、さらに深い関係があった。

神田さんは実は山折を入社させるときに、当時春秋社の顧問であった中村元博士に相談していたというのである。先に述べたように、山折はすでに中村元氏のアショカ論を正面から批判していた人物であった。

中村氏は「私をあのよう批判した人を入社させるのか」と詰問したと後日、神田さんは山折に語ったのだという。大事な顧問の忠告にもかかわ

らず、山折を入社させたのである。これも神田さんが恩人たるゆえんである。

神田さんとの関係の中で、山折は春秋社に専任として勤めた三年くらいの間に、編集の仕事を通していろいろなことを学んだという。特に神田さんからじつに大きな影響を受けた。神田さんと本のこと編集のこと出版のことを話すことを通して、人間をどう見るか、結局のところ人間をどう批評するかという大きな問題に気づくようになったのである。

これらも山折が生涯にわたり、得た大きなものであった。

(3) — (3) 藤井日達上人と山折

前章でふれたように、「書きたいものをかいたらいい。出版したいものを出したらいい。」これが、神田さんの提案した春秋社への入社条件であった。

それに対して山折が胸の中に抱いていた構想は、藤井日達という日蓮宗の僧侶の伝記を作りたいというものであった。非暴力を掲げ反戦反核運動に参画した僧侶である。昭和6年単身インドに渡り、マハトマ・ガンディーに直接教えを受けた数少ない日本人の一人であった。その藤井日達という宗教的人間の可能性と魅力について神田さんに山折は語った。神田さんは何の注文を付けることもなく即座に企画を承知したという。

山折は上人の自伝草稿を携え、インド出張の機会を与えられた。インド哲学を学びインド学を深めるために、大学院生時代に国費留学生に応募したが採用されず、41歳になったこの時が初めてのインド訪問であった。感慨はひとしおであったという。それをかなえたのも先述した恩人神田さんの決断であった。

山折は、現代の宗教思想家の社会的役割という点で、藤井日達上人は鈴木大拙と比肩できる唯一の人物として位置付けている。鈴木大拙は在家で学問的境涯にあったが、藤井上人は終始実践の場にあった。

山折が藤井日達上人にひかれる理由は、生涯において自分自身に課した苦行練行の激しさ、大陸開教にむかう朝鮮、満州、中国、インドへの情熱的な行動、ガンディーゆずりの非暴力思想などであるという。戦後の上人は、戦争と核武装の廃絶

を訴え、諸宗教の指導者との友好を深めた。実践として世界各地に平和のシンボルとしての仏舎利塔を建立することを行っていく。インド、ネパール、スリランカ、アメリカ、ソ連、中国、ヨーロッパにまで及んでいる。それらの功績によりネルー国際理解賞を受賞している。

藤井上人はこの世俗社会を捨てて極楽世界に行こうとは思わないと述べたという。悟りの境地に到達しようとは思わない。問題なのはこの世俗社会の中に寂光土があらわれてくるようにすることであると。しかし結果としてそこに寂光土があらわれてこなくても、この世俗社会を寂光土にしていくための無限運動のような実践が上人の永遠のテーマであると山折は上人との交わりの中で上人の思いをそのように確信していったのである。

そしてまた、上人と出会ったことで山折自身のインドの地への思いも変貌する。かつてインド学という学問を学んでいたころには予想もできなかったような場所に漂っているような気分だと山折自身が表現するように、頭の中で考えていたインドが、からだで感ずることのできるインドに変貌したのである。

(4) 三人の恩人との出会いからみた山折哲雄の恩人観

山折は三人の恩人との出会いを考えるうえでそもそも、その『『恩人』』という言葉の出典はどこかと探してみた。少々調べてみてわかったのだが、驚いたことに『『恩人』』という言葉はどうやら和製漢語であるらしい。少なくとも中国渡来の漢語ではないらしいことがわかってきた。中国文献には一切出てこないのである。」⁽¹²⁾このようにして「『恩人』という言葉を手探りするようになったところ、夏目漱石の名前にぶつかった。漱石の小説の中にこの言葉が印象的に出てくることに気づいたのである。それが『虞美人草』だった」のである。⁽¹³⁾

ここにいう夏目漱石の『虞美人草』とは以下のような物語である。

詩の世界で前途有望な秀才小野は、虚栄心の強い美しい女性藤尾に惹かれ、結婚を目論む。藤尾と小野が逢瀬を重ねる中、古風な女性小夜子が小

野を追って上京してくる。小夜子は小野の恩師の娘で、実質的な許婚であった。貧しい哀れな小夜子と傲慢で資産を持つ藤尾。2人の間で小野は悩む。小野は一度は小夜子と恩師を裏切り藤尾を取ろうと決心するが、藤尾の許婚（と親が決めた）である宗近に「真面目になれ」と諭され、小夜子と婚約する。小野に裏切られた藤尾は、さらに宗近にも振られ、失意のうちに急死する。

山折は三人の恩人との関係を論じてきたが、そこでの問題を義と情に関する問題としてとらえ、それを夏目漱石の作品に登場する人物とだぶらせながら論を展開する。

「主人公の小野さんは東京帝大銀時計組の秀才であるが、若いころ恩を受けた師、井上孤堂先生の娘、小夜子とのいいなづけの関係を解消するかしないかで悩む。新しく登場してきた藤尾という友人の妹に魅力を感じはじめていたからだだった。

その場面で、漱石は「恩人」という言葉を用いて、師と弟子のあいだの重たい関係に言及していた。恩を受けた人に対する義理と人情はどうなったのか。その倫理的な問いを小野さんに突き付けたのが友人の外交官志望の宗近さんだった。やがて宗近さんの義理と人情の論が勝利して小野さんは藤尾をあきらめていいなづけとの関係を取り戻し、藤尾は自殺を遂げる。見るようにこの漱石の『虞美人草』という小説には、「恩人」をめぐる裏切りと負い目の重苦しいテーマが流れていたのである。」⁽¹⁴⁾

「『恩人』との距離を測りながら、自分の行く末を考え始めようとしている小野さんの姿をクローズアップして、この小説はようやく幕を下ろす。小野さんは世話になった孤堂先生の「恩」を着て、その負い目を背負いながら歩いて行こうとしている。小夜子と結婚して、まじめに生きていこうとしている小野さんがそこにいる。」⁽¹⁵⁾

「この一連の物語からわかるように漱石は何らかの恩義のある人に対しておのずから守らなければならない義務というか、負い目があると考えていたようだ。そしてその恩義のある人のことを『恩人』という言葉で呼んでいるのである。この重苦しい

負い目を引き受けなければならない人、それが『恩人』なのだといっている。漱石の言う『道義心』というの、このような『恩人』に対する考え方に由来し、それと表裏の関係をなしていることがわかる。旧時代と新文明の価値観のはざまに出現した人間類型だったといえないこともないだろう。この小説の最後のところで、登場人物の一人に、作者はこんなことをいわせている。『世話になった以上はどうしたって世話になったのさ。それを返してしまうまでは、どうしたって恩は消えやしなからね。』と。⁽¹⁶⁾

山折は、彼自身が「義理と人情という封建倫理の、前近代的な道德感情をテーマにした前近代的作家」と呼ぶ、長谷川伸の「恩というのは、返すものではない。恩は着るものである。」という言葉に注目している。漱石の『虞美人草』でも、そこで使われている「恩人」が同じような文脈で出てくるというのである。

「日本人の倫理の根底に恩と感謝の気持ちが横たわっていると指摘する人は多いが、その恩と感謝の基本的な心のあり方とは何かということになると、この長谷川伸の言葉が要所をついているという気がする。ギブ・アンド・テイクの関係ではない。恩を与えるとか、恩を頂くというものでもない。それは、『着るもの』なのだ、といっている。恩を着せるとか、恩着せがましいといういい方はその転用であるが、義理と人情という相関の問題を考えると、この恩の問題にたいする長谷川伸のとらえ方が非常に重要だという気がするし、またその方が感情の機微をよく表していて面白い。そこには漱石の言う『道義心』の問題もからんでいるからだ。」⁽¹⁷⁾ というのである。

さらにこの論理は漱石の『草枕』の冒頭にも表現されているという。

「『智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。』というよく知られた言葉にも通じるだろう。つまりそこで取り出された智・情・意の相互の関係をどう解釈するかの問題にもこれは関わってくる。智・情・意のバランスが取れた形になっているときは、人間は人間らしく振る舞うことができる、という風に漠然と考えたくなるけれども、漱石の言葉の使い方は、おそらく

長谷川伸が言っている『恩は返すものではない、着るものだ』という言葉に通じるものがあると私は思う。恩を返そうとすれば角が立つ、情が棚上げされるからだ。そしてそれは意地っ張りにも見える。黙ってありがたく頂いておけばいいのだ。その感情の微妙な動きが『着るということ』によく表れている。恩の背景には義理とか人情とかという感情にまつわる人間関係がまつわりついていて、そういう義理とか人情の世界で生きている人間が、ある大切な人から、ある助けを得たときに、それは黙っていただいておけばいい、着ればいい、それが恩人というものにたいする大事な態度であり、礼儀なのでといっている。恩人の問題を考えるうえで、この長谷川伸的な人間認識と漱石の人間認識とはほとんど同じ土俵で育まれ、生み出されたものではないかと私は思うようになったのである。」と。⁽¹⁸⁾

「漱石はその人間の「心」の中には善人も済めば悪人も済んでいると考えるようになる。そのことがのちの『こゝろ』という小説のなかに出てくる『先生と遺書』という最後の章に、こういう言葉がでてくるからだ。『人間にはいい人間もいれば、悪い人間もいる。善人もいれば、悪人もいる。しかし、実は善人の心の中に悪人が住んでいるのだ。』

単純な善悪の旗を掲げるなかれということを漱石はいつているのである。その言葉の裏側からは、道義心などといっても、そんなものがあてになるものか、という漱石の嘆きの声までがきこえてくるようだ。

漱石は善人とか悪人というものを、いつも相対的な関係性の中でとらえていて、そういうことを念頭において、『恩人』という言葉を使っていたのだろう。義理と人情の葛藤のなかで、しかし人間関係として大事にしなければならない問題として、恩とか恩人という問題を考えていた。単純に善とか悪とかという問題では割り切れない。けれども、恩人と言いながら、道義心というテーマを同時に考えながら、その恩人にたいする人間としての振る舞い方にこだわり、心の中ではそれを重荷に感じている、つまり重苦しい負い目になっている。それは自分の心の中に悪人が顔を出しているということではないかと。そしてそのように考えを詰めていくと、恩人の問題は単に善か悪かの枠組み

では測れないような葛藤の舞台でもあることが見えてくるのである。」⁽¹⁹⁾

以上のようにして山折は漱石の小説の中に、人間の心性としての恩、道義心の問題を、人間の心の葛藤と絡めながら、善と悪との深く複雑な心性としてとらえているのである。山折は「恩人」の問題を巡り三人の恩人の存在とその三人を巡る自己の精神を漱石の作品の中に見出し投影し、さらに次のように回想する。長くなるが、山折の恩人観を探る上で重要な部分であるので以下に引用する。

インドの地に実際に感じた印象を取り上げて、山折は回想する。

「大学で『インド学』という学問を学んでいたころには、とても予想できなかったような場所に漂いでいるような気分だった。インドという国土をとおして、そしてまたインドの旅を経験して、頭のなかで考えていたインドがからだで感ずることのできるインドへと変貌していく経験を顧みて、それは、はたしてインドへの扉を初めてあけてくださった金倉圓照先生が望まれたことだったのだろうか。気が付いたとき、そんな疑問に取りつかれている自分が、そこにいた。鈴木学術財団をやめて春秋社に編集者として入社したころから、胸のうちにきざし始めていた疑問だった。後ろめたい気持ちだが、その疑問の底にはりついていて。そのたびに、私はその不安を打ち消したり、忘れようとしていたことを思いおこす。

もしかすると自分は、先生を裏切っているのかもしれない。そんな負い目のような重荷のようなものを感ずることがあった。先生の墓参りはまだはたしてはいなかった。突然、そんな思いにとらわれるようになった。負い目と、まだ果たしていない墓参りの二つのことが走馬灯のように頭の中をめぐりはじめたのである。

大学院にいたときに先生から言われた言葉が蘇った。『教師というものは、一度は学生に裏切られるものだ。』それは、これから教師のアルバイトをしようとしている未熟な私に対する先生のはなむけの言葉だった。そして励ましのいましめだったのかもしれない。」⁽²⁰⁾

「三人の恩師のその変幻する姿や形が、漱石の『虞美人草』に登場する『恩人』、井上弧堂先生に重なったり離れたりするようになった。それがまた『恩人』

という存在に関心を示す漱石の考え方と二重写しになったり、私の意識を強く刺激するようになった。

立ちどまって、ふと思う。恩人とはやはり、はるかな時の流れの中で懐かしく蘇ってくる思い出のようなものではないかと。自分の過去の歩みの中にいつでも浮びあがっていた原風景のようなものではないだろうか。その現場において、涙も血もながしていたはずの風土、のようなものではなかったか。だが、そのはるかな時の流れのなかでも、消し去ることのできない負い目のようなものだけはいつまでも残っている。師のもとからしらずしらずに離脱してしまった負い目、といっている。

学問の道標を示してもらいながら、脇道にそれてしまった負い目である。教師というものは一度は裏切られる、といった師の言葉が忘れられない。それがいつも両の肩に重くのしかかっている。編集者魂といった貴重な宝もどこかに置き忘れてきたような不安から、いぜんとして自由になれないでいる。

神田さんは人間の嘘っぽさをはじき飛ばすような生き方を教えてくれた恩人だったから、そこからも遠ざかってしまった自分がそこにいる。

藤井上人は、いつも振り仰いでいるほかはない宗教的人格だった。けれど気づいてみれば、『インド』や『仏教』をめぐるあまりにも個人的な体験の糧にしかできなかったエゴイスト的な自分の姿が嫌でも浮き彫りになる。そのどれもこれもが癒しがたい負い目を刻印している。その負い目が、いつも恩人たちのなつかしい思い出の中に立ち上ってくる。それがいつまでも消えることがない。その負い目を何と言ったらいいのだろうか。」⁽²¹⁾と。

(5) 山折哲雄の恩人観

山折は自己の三人の恩人との出会いから人間における恩について考察をめぐらし、漱石の『虞美人草』『草枕』『こゝろ』のなかにみられる恩人、道義心、善、悪のとらえ方に思い至った。そしてさらには、恩という問題を、日本の伝統的な経済行為とそこに流れる心性とに関連付けて考えようとしている。

「恩」を辞書で引けば、ただちに(君主や親などの)恵み、慈しみ、情け、などの意味が出てくる。そ

してそれらを受けた方がありがたく思うべき行為、といった定義が現れる。これを山折は、「相手に与えるものは最小限に評価し、それに対して相手から与えられたものは最大限に評価する態度や生き方」と表現しなおしている。そしてこのような態度を経済的な用語になぞらえて、「債務至上主義」と呼ぶ。債権の主張をできるだけ抑制し、禁欲する態度であり、それは「恩」という債務を最大限に背負う意思を示すことでもある。債権を半ば放棄してもいいという意思表示であり、恩を受けることで生じた負い目をいつまでも背負っていく気持ちるを表明することにつながるというのである。⁽²²⁾

「この債務至上主義の感情が、漱石の『虞美人草』においても登場人物の心のなかに義理と人情の感情を呼び覚まし、道義のつよい願望を掻き立てる。債務至上主義の思いが羽ばたいて、『真面目になれ』という宗近君の忠告になり、それがみんなの胸をうち、小野さんの回心と翻意を促す。単純に恩を受けた義理に引きずられていくというのではない。ただひたすら情に身をゆだねていくというのではない。肝心なところといえば真面目になって、債務至上主義に殉じてみよ、ということに尽きる。恩人によってもたらされた負い目を最後まで身に引き受けてみよ、ということなのだろう。」⁽²³⁾と。

これを受けて山折はこう結ぶ。

「ここまで書いてきて、自分もまたあらためて、かけがえのない三人の恩人たちの前に膝を屈し、返す当てにない債務(恩)の重荷を背負いながら、この先の残り少ない道をとぼとぼと歩いていくほかないのだろう。その個々の原風景ともいうべき海山のあいだのせまい道を独りで往くほかないのである。」⁽²⁴⁾と。

(6) 恩と人間形成—結びに変えて

恩は多くの場合は、与えられた恩に対して自己を良い方向に向かわせ、向上させることで、恩にみあう自己を少しでも形成しようとする原動力としてはたらくのではないかと思われる。しかし山折の恩人との関係、漱石の作品から示唆を受けた山折の恩人観は、決して単純で明快なものではない。以上みてきたように、恩と呼ぶほどの深いものは単純に返すことのできるものではない。単純に返すことのできるほど浅いものでもない。常に、

あるいは時折顔をのぞかせては恩に対してそれを返せない自分に負い目を感じる。あるいは恩を感じつつもそれに一途に向きあえない自己の状況。恩返しを心に思う自己と、あれは恩ではない、返すこともないと軽んじてみせる、うそぶくような自己との葛藤。そんな自己の中の善人と悪人が渦巻く中で、やはり恩は恩なのである。脱げる当てのない、あるいは脱ぐことのできない恩をただひたすら身にまといながら生き続けるしかないのではないか。山折の恩人観から学んだ示唆を、人間形成上の問題として今後さらに考察を深めていきたい。

注

- (1) 小学館 日本大百科全書
- (2) 三省堂大辞林 第三版
- (3) 小学館 日本大百科全書
- (4) 木村宣彰は「生活の中の仏教用語」
- (5) 山折哲雄『恩人の思想』ミネルヴァ書房 2017年
- (6) 同上P50
- (7) 同上P59
- (8) 同上P61
- (9) 同上P61
- (10) 同上P36
- (11) 同上P83
- (12) 同上P15
- (13) 同上P15
- (14) 同上P203
- (15) 同上P225
- (16) 同上P17
- (17) 同上P20
- (18) 同上P21
- (19) 同上P28
- (20) 同上P201
- (21) 同上PP229～230
- (22) 同上P231
- (23) 同上P232
- (24) 同上P233

— 2017.9.1 受稿、2017.9.2 受理 —

